

電気新聞 連載

時評「ウエーブ」 第十一回

# 信念という名の無限の泉

元世界銀行副総裁

シンクタンク・ソフィアバンク シニア・パートナー

西水美恵子

## 時評「ウエーブ」 第十一回 信念という名の無限の泉

オバマ米大統領の就任演説を聞いていて、溢れる涙が止まなかった。ハートがハートに語りかけるパワー・スピーチ（迫力のある演説）を、久しぶりに聞いた。

新任副総裁としての抱負を世銀職員に語った時のことを、思い出した。スピーチを終えた後、世銀の意識改革の茨の道を共にしていたマネジメント・コンサルタントに「どうだった？」と感想を聞いたら、叱られた。「頭が勝っている。

ハートで話さないと駄目だ。首から上だけでリードしても、人はついてこない」頭では分かっても、腑に落ちない顔をしていたのだろう。彼の仲間の一人、マサチューセッツ工科大学で経営学を教えるピーター・センゲ教授に会えと勧める。「ちょうど、組織改革の講演をしに、世銀に来るから」。半信半疑で聞きに行つて、泣いた。

大講堂は立ち見席まで満員だった。その顔の海の中にある会ったこともない一人なのに、自分を信じて話してくれていると思つた。一人の人間として、胸をはだけて話してくれる。謙虚で飾らず、己惚れなどない。淡々と語る言葉ひとつひとつに、魂が籠っていた。ハートで語りかけるといふことはこういうことなのかと、初めて知つた。

講演の後、センゲ教授をお茶に招いて、ゆっくり語るひとときを得た。夢見る世銀意識改革のビジョンを話していたら、ソファアに座っていた教授がうなだれて目を瞑ってしまった。つまらない話で居眠りをさせてしまったかと、赤面しながら話し続けた。ふと教授の頬が濡れているのに気づいた。途端にとてつもなく大きな勇気が湧いたのを、覚えている。

同席したマネジメント・コンサルタントが「ハートで話していたね」と珍しく褒めてくれた。が、彼は厳しかった。恥ずかしがりやのせいか、大勢の人の前で話すのが苦手な私のこと。「副総裁の任務どころか、改革のリーダーシップにも支障をきたす。パワー・スピーチの訓練を受けろ。これは助言ではない。命令だぞ！」

パワー・スピーチの技法は、思いのほか簡単だった。

▽始めは単刀直入に力強く。冒頭の1分はプライム・タイムで視聴率最高。挨拶などの無駄使いで落とすと、絶対元に戻らない。

▽音量を下げる。耳はうるさい声を避け、静かな声に聞き入る。

▽専門用語は絶対禁止。分かる人も、分からない人も、感心などしてくれない。伝えたいのは内容だから、使う言葉は簡素に限る。

▽沈黙も語彙の内。スピーチの段落や、強調したい言葉、訴えたい主旨は、聴衆に見えにくい。前後に沈黙を入れると、見える。

▽言葉で絵を描く。人間の脳は物語や、実例、色などに正反応して、覚えがよくなる。

▽無テーマの演説は、退屈な演説。テーマは簡単明瞭に、ひとつに限る。複雑なテーマや複数なのは、テーマなしと同じこと。

▽終わりは感情を込めて。感情なしに感動はない。

上達は望めなかったが、貴重なことを教わった。いくらテクニックを駆使しても、人に信じてもらえなければパワー・スピーチにはならない。その信頼の有無は、自分自身の姿勢で決まる。自分に正直で、なおかつ絶対無条件に人信じることから始まるのだと。

「言うは易く行なうは難し」と肩を落とす私を、スピーチの先生が笑って諭した。

「人に伝えたいと心底願う固い信念さえあれば、簡単さ。信念は情熱を呼ぶ。情熱は無条件の信頼を怖れない。パワー・スピーチの技法など自然に使うようになる。人の心に感動を与え行動へと誘うインスピレーションの源は、信念という名の無限の泉だ……」

我が国の政治家には、演説下手な人が多い。その理由が、ここにある。

## 著者紹介

西水 美恵子（ にしみず みえこ ）

1975年、米ジョンズ・ホプキンス大学大学院博士課程修了後、プリンストン大学助教授（経済学）。80年に世界銀行入行。97年、南アジア地域担当副総裁に就任。2003年に退職。現在は独立行政法人経済産業研究所コンサルティングフェロー。07年に、シンクタンク・ソフィアバンク シニア・パートナー就任。著書に『貧困に立ち向かう仕事』。

著者へのご意見やご感想は、下記アドレスにお送りください。

個人メールアドレス [nishimizu@sophiabank.co.jp](mailto:nishimizu@sophiabank.co.jp)

本稿は、西水美恵子氏が、二〇〇九年二月四日付の電気新聞に、寄稿したものです。

著作権は、著者に帰属しますが、配布は自由に行っていただけます。